

第4章 大学生および大学に通っていない若年成人の物質（薬物）使用

概要

2023年の調査において、19歳から22歳の大学生および大学に通っていない若年成人の物質（薬物）使用経験率の違いは、以下のようであった：

•**喫煙（シガレット）**：2023年の調査において、大学に通っていない若年成人は、喫煙経験率が高い（年経験率、月経験率、日経験率）。

•**ニコチンの加熱吸引(Nicotine vaping)**：2023年の調査において、大学に通っていない若年成人は、ニコチンの加熱吸引(Nicotine vaping)経験率が高い（年経験率、月経験率）。これは、過去5年間において、大学に通っていない若年成人の月経験率が有意に増加したことに続くものである。

•**大麻・マリファナ**：大学に通っていない若年成人は、大学生と比較して、大麻・マリファナの月経験率が高い。また、あらゆる形態の大麻使用の日経験率が高い。

動向については、特に断りのない限り、全年齢層のデータが初めて収集された1980年以降を示している。大学生と大学に通っていない若年成人の動向は以下のようであった：

•**大麻・マリファナ**：大麻の日経験率は、大学生に通っていない若者の間で増加しているが、過去10年間で大学生では増加していない。

•**アルコール（飲酒）**：2023年調査において、大学生の間では、アルコール使用（飲酒）の月経験率は、10年間の大幅な減少傾向に続いて、歴史的な低水準に達し、2022年の62.0%から2023年には55.0%に有意に減少した。（2023年調査において大学生の飲酒月経験率は、大学に通っていない若年成人の経験率51.9%をわずかに上回っているが、有意ではない。）

○大学生の場合、大量飲酒の経験率は2023年に史上最低の24.4%を記録した。

○大学生のうち女性についてみると、飲酒経験率は2022年の26.8%から2023年には19.9%に有意に減少したが、飲酒経験率は2020年のパンデミック時に観測された過去最低の18.2%を上回っている。

○大学生と大学の通っていない若者との間、および男性と女性との間の差は小さくなった。2023年調査では、大量飲酒に関しては、大学生活や性別によって有意の差はなかった。

•**その他の物質（薬物）使用¹⁾**：大麻以外の物質（薬物）の使用経験率は2022年に過去最低を記録した後、2023年には大学生および大学に通っていない若年成人双方でわずかに増加したが、有意ではなかった。

○2023年調査では、大麻以外の物質（薬物）使用経験率には大学生と大学に通っていない若者の間で違いはなかった。

○2023年調査では、大麻以外の物質（薬物）の使用経験率は、女性の大学生より男性の大学生で高かった。

はじめに

Monitoring the Future(MTF)研究では、米国の大学生について、複数の形態の物質（薬物）使用経験を追跡し、4年半にわたるデータ収集ができた。この章では、大学生と大学に通っていない（高等学校を卒業した）若者の物質（薬物）使用の現状と傾向に焦点を当てた。具体的には、19歳から22歳までの典型的な大学進学年齢（つまり、高等学校卒業後1年から4年）に焦点を当てた。

MTFは、1980年以降、高等学校在学時にMTF調査を受けた大学生と同年代の大学に通っていない若者を卒業後に連続して追跡することで、大学生と大学に通っていない同年代の若者の毎年の全国サンプルを収集することができた。1976年の卒業生は、高等学校卒業後のそのような最初のグループであり、1980年までには、高等学校を卒業した1~4年の大学生を対象とした調査を実施した。MTFの追跡調査サンプルは、ほぼ4年半(1980年から2023年)にわたって米国の大学生集団を良くカバーしてきた。これまでの結果は他の報告を参照のこと。

MTFは高等学校の高学年において、前向き調査のためのサンプルを得るため、大学において機関ベースのサンプルに依存する場合と比較して、広く代表的な大学のサンプルを採取することができ、この点が大きな利点である。さらに、「大学入学前、大学在学中、大学卒業後」を調査のデザインとすることにより、大学生活に関連する多くの変化を検討することができる。この調査デザインでは、高等学校卒業後の4年間に大学に通っていない若年成人に対しても比較可能なパネルデータを生成した。この対象集団は、それ自体が若年成人集団の重要な部分であるとともに大学生グループの比較グループでもある。

大学生の定義

19歳から22歳まで

MTFでは、大学へ進学する最も一般的な年齢の大学生と同年齢の大学に進学しない若者を比較する。米国国勢調査局²と全米教育統計センター³の統計によると、この年齢層は、2019年にフルタイムで在籍した全学部生の約73%を占めている。

フルタイムの学生

ここでは、大学生とは、高等学校を卒業して1~4年の若年成人で、調査の年の3月の初めに2年制または4年制の大学でフルタイムの学生としてコースを受講していた学生とした。具体的には、コミュニティカレッジなどの2年制大学のフルタイムの学生および4年制大学のフルタイムの学生をカレッジの学生と見なした。一方、パートタイムで通っている学生や以前に大学に通っていたが現在は通っていない学生は、大学に通っていない若者に含めた。ここで定義するフルタイムの大学生は、2023年調査において、高等学校卒業後1~4年間のフォローアップしたサンプル全体の約5分の3(60%)を占めており、毎年約800~1,600人の調査回答者が大学生サンプルに含まれている。

大学に通う若年成人の割合とその人口統計の変化は、時間の経過に伴う変化の解釈に関

連する。例えば、大学生に占める女性の割合は、1980年以降、大幅に増加している。1980年には、女性は大学の回答者の約50%であったが、2023年には67%になった。以下では、これらの変化する比率が全体的な物質（薬物）使用経験率の推定値にどのような影響を与えるかを評価できるように、大学の男性と女性の経験率と傾向を別々に示す⁴。

大学に通っていない若年成人

MTFのパネルには、高等学校を卒業して1~4年経ったが、フルタイムで大学に通っていなかった高等学校卒業生も含まれている。このような両グループのデータを持つことは、MTFパネル研究の稀有で貴重な特徴である。時代を経て大学に通う若年成人が増えるにつれて、大学に通っていない若年成人は比較的小きなサンプルサイズを占めるようになる（したがって、大学に通っていない若年成人の推定の精度は低下する）。毎年、約500~1,700人の回答者が、高等学校卒業後1~4年の大学に通っていない若者グループを構成している。もし、欠落している高等学校中退者セグメントのデータ（クラスコホートの約15%から約5%に減少している⁵）を大学に通っていない若者グループの一部として含めることができれば、物質（薬物）使用に関する2つのグループの差はもっと大きくなる可能性が高い。

最も一般的な物質（薬物）：大学生と大学に通っていない若者の使用経験率と傾向

物質（薬物）使用経験率の推定値と傾向を、大麻・マリファナ、アルコール（飲酒）、たばこ（シガレット喫煙）、加熱吸引（Vaping）、および大麻以外の薬物などの、最も一般的に使用される物質（薬物）について最初に提示した。次に、他の特定の物質（薬物）の使用経験率の推定値を示し、最後に、最も一般的な物質（薬物）の使用について、大学生若年成人の経験率を性別にその傾向を示した。動向は、特に断りのない限り、全年齢層のデータが初めて収集できた1980年以降について示した。大学生と大学に通っていない若年成人の違いを示す表や図は、<https://monitoringthefuture.org/data/panel/college-noncollege/>のMTFパネルデータダッシュボードの一部からも得られる。

大麻・マリファナ

年経験率および月経験率：大麻使用（あらゆる形態）の年経験率は、2023年調査では、大学生（39.5%）と大学に通っていない若年成人（38.9%）でほぼ同じであった（表/図96）。同様に、2023年調査の大麻使用の月経験率は、大学生（26.1%）と大学に通っていない若年成人（28.8%）でほぼ同じであった（表/図97）。

日経験率：2023年調査では、大麻の日経験率は、大学に通っていない若者（11.6%）の方が大学生（6.3%）よりも高かった（表/図98）。

大麻の加熱吸引（大麻 Vaping）：大学に通っていない若年成人の大麻の加熱吸引（大麻 Vaping）の年経験率および月経験率は、それぞれ26.4%および19.6%であり、大学生（それぞれ24.7%、14.2%）より高かった。表/図96および97）。

動向：大麻の使用経験の傾向には、大学生と大学に通っていない若年成人の両方で、過去1年または5年間で大きな変化がなかった。しかし、過去10年間のスパンで見ると、大麻の月経験率が増加した(大学生では2013年から2023年にかけて21.1%から26.1%に、大学に通っていない若年成人では25.8%から28.8%に増加。表/図99)。

大麻の日経験率は、大学に通っていない若年成人では過去10年間で増加したが、大学生で増加はなかった(表/図101)。

2017年に初めて調査項目に加えて以来、大麻の加熱吸引(大麻Vaping)の月経験率は、大学生(過去5年間で2018年の10.0%から2023年の14.2%)および大学に通っていない若年成人(2018年の7.7%から2023年の19.6%)の両方で増加した(表/図103)。

アルコール(飲酒)

年経験率および月経験率：アルコール使用(飲酒)の年経験率(74.9%対72.5%)および月経験率(55.0%対51.9%)には、大学生と大学に通っていない若年成人との間に有意差はなかった(表/図96および97)。

日経験率：アルコール使用(飲酒)日経験率には、大学生(1.9%)と大学に通っていない若年成人(2.8%)の間に差はなかった(表/図98)。

暴飲：2023年調査では、大学生(21.9%)と大学に通っていない若年成人(20.3%)の過去2週間における大量飲酒経験率はほぼ同じであった(表/図98)。大量飲酒は、長年にわたり、大学に通っていない若者よりも大学生の間で一般的であったが、2022年と2023年調査では、両者に大きな違いはなかった(表/図107)。

高強度の飲酒(大量飲酒)：過去2週間の高強度飲酒(連続10杯以上の飲酒)経験率は、2023年調査では、大学生(5.1%)と大学に通っていない若年成人(8.4%)の間で差がなかった(表/図98)。

動向：動向をみると、大学に通っていない若年成人のアルコール(飲酒)の月経験率は、過去10年間で減少した(2013年の56.6%から2023年の51.9%)。また、大学生においても、1年前(2022年の62.5%)および10年前(2013年の62.0%)から2023年には55.0%へと有意に減少した(表/図105)。大学生におけるこの月飲酒経験率の傾向は、新記録となる歴史的な低水準である。

同様に、大学生および大学に通っていない若年成人の大量飲酒経験は、10年間のスパンで長期的な減少傾向を示している(表/図107)。また、大学生の間では、2022年の27.7%から2023年には21.9%へと1年間のスパンで見ても有意に減少しており、これは大学生の間での大量飲酒の歴史的な低水準である(表/図107)。

たばこ(シガレット喫煙)

年経験率および月経験率：2023年調査では、大学に通っていない若年成人の年喫煙率は20.3%、月経験率は8.3%であり、大学生の年喫煙率13.7%および月経験率4.0%よりも有

意に高かった。表/図 96 および 97)。

日経験率：2023 年調査では、大学に通っていない若年成人の喫煙日経験率は、大学生よりも有意に高かった(2.2%対 0.6%;表/図 98)。

動向：たばこの使用（シガレット喫煙の年経験率の傾向は、過去 5 年間と 10 年間で、大学生および大学に通っていない若年成人の両方で大幅に減少した（表/図 109）。2023 年調査では、喫煙の月経験率は大学に通っていない若年成人では前年（2022 年）から有意ではないが増加(7.0%から 8.3%)し、一方大学生では有意でないが減少(6.4%から 4.1%)した。

ニコチンの加熱吸引(Nicotine vaping):

年経験率および月経験率：2023 年調査では、ニコチンの加熱吸引(Nicotine vaping)の年経験率は、大学に通っていない若年成人では 35.6%であり、大学生の 25.8%より有意に高い。また月経験率も、大学に通っていない若年成人では 28.8%であり、大学生の 18.0%よりそれぞれ有意に高かった。表/図 96 および 97)。

動向：2017 年にニコチンの加熱吸引(Nicotine vaping)を調査項目に加えて以来、ニコチンの加熱吸引(Nicotine vaping)は劇的に増加している。大学に通っていない若年成人では過去 5 年間で有意に増加している。具体的には、2017 年以降、その月経験率は 2 倍以上に増加した(2018 年の 13.4%から 2023 年の 28.8%へ。表/図 111)。一方、大学生では過去 5 年間で大幅な増加は見られなかった(表/図 111)。

大麻以外の薬物

大麻以外の薬物の非医療的使用に関しては、幻覚剤(LSD を含む)、コカイン、アンフェタミン、鎮静剤(バルビツール酸塩)、精神安定剤、麻薬(ヘロインを含む)について示す。

年経験率および月経験率：2023 年調査では、大麻以外の薬物の使用経験率は、大学生と大学に通っていない若年成人では同程度で、年経験率(それぞれ 12.0%、15.2%)と月経験率(それぞれ 4.2%、5.4%)に有意の差はなかった。表/図 96 および 97)。

動向：大学生では、大麻以外の薬物の使用は過去 5 年および 10 年間で減少している(2013 年の 8.4%、2018 年の 7.3%から 2023 年の 4.2%。表/図 113)。大学に通っていない若年成人では、過去 10 年間で長期的に減少傾向がある(2013 年の 10.8%から 2023 年の 5.4%へ。表/図 113)。2023 年調査結果は、大学生および大学に通っていない若年成人の大麻以外の薬物使用の経験率が史上最も低かった 2022 年からはわずかに増加であるが、有意ではない(この質問項目を調査に加えたのは 1980 年)。

その他の物質(薬物)：

MTF の大学および大学に通っていない若年成人についての物質(薬物)経験率調査には、多くの個々の物質(薬物)に関する特定の質問を含めている。以下は、幻覚剤、あへん系麻薬(オピオイド)、鎮静剤/精神安定剤、覚醒剤、およびたばこ(シガレット)以外の形態

のたばこの使用に関する大学生および大学に通っていない若年成人の年経験率レベルを示す⁶。

幻覚剤(幻覚剤)

幻覚剤の年経験率は、2023 年調査では大学生と大学に通っていない若年成人で、ほぼ同じであった(それぞれ 7.5%、10.8%)。また、両グループの LSD(それぞれ 1.8%、2.3%)、LSD 以外の幻覚剤(それぞれ 7.4%、10.4%)、MDMA(エクスタシー、モリー;それぞれ 0.3%、1.2%)、ケタミン (それぞれ 1.8%、0.9%)の年経験率についても有意差は認められなかった。表/図 96)。

あへん系麻薬(オピオイド)

2023 年の調査では、ヘロインとヘロイン以外のあへん系麻薬の年経験率は、大学生と大学に通っていない若年成人で同程度であった(ヘロインはともに 0.05%未満、その他のあへん系麻薬については大学生で 0.5%未満、大学に通っていない若年成人で 1.2%未満 (表/図 96)。大学生と大学に通っていない若年成人の Vicodin の使用または OxyContin の使用には有意差はなかった (表/図 96)。

鎮静剤と精神安定剤(睡眠薬と抗不安薬)

2023 年の調査では、大学生と大学に通っていない若年成人の鎮静剤(バルビツール酸塩)(それぞれ 0.6%、0.9%)と精神安定剤(それぞれ 1.2%、1.6%)の年経験率レベルがほぼ同じであった(表/図 96)。

覚醒剤

医師の処方箋なしのアンフェタミン使用の年経験率は、大学生と大学に通っていない若年成人でほぼ同じであった (それぞれ 3.6%、2.6%;表/図 96)。2020 年以前の調査ではアンフェタミンの使用経験率は、大学生が大学に通っていない若年成人よりも高いことが通常に観察されたが、これはおそらく研究目的でのアンフェタミンの使用(特にアデロールの使用)によるものと思われる。

注意欠陥・多動性障害(ADHD)の治療に処方されるアンフェタミンのサブクラスであるアデロールを、医学的監督なしで使用した経験率は、2023 年調査では、大学生と大学に通っていない若年成人でほぼ同じであった(それぞれ年経験率 0.8%、2.4%。表/図 96)。ADHD に処方される別の覚醒剤であるリタリンの非医療的使用は、現在は、大学生および大学に通っていない若年成人ともに低くなっている (2023 年調査では、年経験率はそれぞれ 0.7%、0.4% (表/図 96)。

2023 年調査では、コカイン年経験率は、大学生と大学に通っていない若年成人でほぼ同じであった (それぞれ 2.2%、2.9%)(表/図 96)。

メタンフェタミン年経験率は、2023年調査では、大学生と大学に通っていない若年成人で同程度であった(両グループとも0.05%未満)(表/図96)。

処方医薬品

処方医薬品(あへん系麻薬、鎮静剤、精神安定剤、覚醒剤を含む)の非医療的使用(医師の処方箋なしの使用)は、2023年調査では、大学生(4.4%)と大学に通っていない若年成人(5.4%)で同じであった(表/図96)。同様に、2023年調査では、処方医薬品の非医療的使用の月経験率でも差がなかった(表/図97)。

たばこ(シガレット)以外の形態のたばこ

ニコチン使用(ニコチン過熱吸引 Nicotine vaping、紙巻きたばこ、大型葉巻、小型葉巻、水ギセルを使用するたばこ、無煙たばこを含む)年経験率は、2023年調査で追加された新しい項目である。これらの指標に大学生と大学に通っていない若年成人の間に有意差はなかった(2023年調査では大学生32.5%、大学に通っていない若年成人38.4%;表/図96)。また、大型の葉巻、小型の葉巻、水タバコを使用したたばこ、無煙たばこ、スヌース、ニコチンパウチなど、個々のたばこ使用についても、大学生と大学に通っていない若年成人の間に有意差はなかった(表/図96)。

大学生における性差: 最も一般的な物質(薬物)使用に関して

大麻・マリファナ

2023年調査では、大麻の使用経験率には、大学生の男女間に有意差はなかった(年経験率、月経験率、日経験率;表/図96-98)。2015年以前は、大学生では、男性は女性よりも一貫して大麻の経験率が高かった。しかし、大学生の女性の間で、大麻の月経験率が有意に増加している(2013年の16.2%から2023年の25.6%に増加。表/図100)⁴。

アルコール(飲酒)

2023年の調査では、大学生の男性と女性の間で、アルコール(飲酒)経験率(年経験率、月経験率)に大きな差はなかった(表/図96および97)。大学生の女性の月飲酒経験率は、2022年(65.8%)から2023年(58.4%)にかけて有意に減少したが、2023年の男性のレベル(51.0%)よりも有意ではないがわずかに高い(表/図106)。2000年以前は、大学生の男性の月飲酒経験率は一貫して女性より高かったが、過去10年間で大学生の男性の月飲酒経験率は有意に減少した(2013年63.3%から2023年51.0%)。一方、女性では過去10年間で大きな変化は見られない(表/図106)。

大量飲酒については、大学生の男性(2013年の41.9%から2023年24.4%)と大学生の女性(2013年の29.5%から2023年19.9%)の両方で、過去10年間で有意に減少した。(表/図108)。これは、1980年に初めて調査項目に加えて以来、大学生の間では史上最低値である

(表/図 108)。大学生の女性の大量飲酒も、2022 年の 26.8%から 2023 年の 19.9%へと 1 年間で有意に減少したが、2020 年のパンデミック時に報告された最低水準の 18.2%は上回っている (表/図 108)。

たばこ (シガレット喫煙)

大学生の男性と大学生の女性のシガレット喫煙経験率に有意差はなかった(表/図 96-98)。大学に通っていない若年成人では、シガレット喫煙の年経験率は、男性が女性よりも高かった(それぞれ 26.2%、12.0% (表/図 96)。また、および月経験率も男性が女性より高かった (それぞれ 11.3%、3.8%;表/図 97)、しかし、日経験率には有意差はなかった (それぞれ 2.6%、1.0%;表/図 98)。シガレット喫煙の月経験率の傾向は、大学生の男性と女性で類似しており、男性では過去 5 年と 10 年、女性では過去 10 年間で有意に減少した(表/図 109)。

ニコチンの加熱吸引(Nicotine vaping)

ニコチンの加熱吸引(Nicotine vaping)経験率には、大学生においても大学に通っていない若年成人においても男性と女性で有意差はなかった (表/図 96 および 97)。大学に通っていない若年成人の月経験率は、過去 5 年間で、有意に増加し (2018 年の 13.4%から 2023 年の 28.8% (表/図 111)、2023 年調査における大学生と大学に通っていない若年成人の間の有意差の要因となっている (表/図 96 および 97)。大学生の女性においても、ニコチンの加熱吸引(Nicotine vaping)の月経験率 2018 年の 12.0%から 2023 年には 16.9%へと 5 年間で有意に増加した(表/図 112)。

大麻以外の薬物

大麻以外の薬物の使用は、大学生の間では男性が女性より著しく多い (年経験率それぞれ 16.0%、8.3%、表/図 96、月経験率それぞれ 7.0%、1.7%、表/図 97)。しかし、大麻以外の薬物の月経験率は減少傾向にある。大学生では、男性の場合、これらの減少は過去 10 年間のスパンで観察される (2013 年の 10.4%から 2023 年の 7.0%へ。表/図 114)。女性の場合、過去 5 年と 10 年間のスパンで有意の減少が見られた(2013 年の 6.8%、2018 年の 8.1%から 2023 年の 1.7%へ。表/図 114)。